
俺と雷と幻想郷!?

ふれいむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と雷と幻想郷！？

【Nコード】

N6838X

【作者名】

ふれいむ

【あらすじ】

ただの平凡な中学生一年生、神依崎祠雷^{かみいさきしらい}は突然幻想入りしてしまう、外の世界の未練もなく、そのまま幻想郷に住むことにした祠雷は、強くなりたいという思いを持ち、騒がしい暮らしを送っていくこととなる。

雷を操る程度の能力（前書き）

文章に読みづらいところが多々あると思いますが温かい目で見てくださいと助かります。

若干のキャラ崩壊、オリキャラありますがそこはスルーの方向でお願いいたします。

雷を操る程度有能力

俺の名前は神依崎祠雷^{かみいさきしらい}、名前のせいで廚二だのなんだの言われるが立派なサッカー好きの健全な人間でアニメとかは興味ない。

サッカー部の一年レギュラーなのが唯一の自慢、中体連では出れたけど負けた、折角のツアーアシストなのに無駄だった。キック力は自慢できるか。

勉強は絵に書いたような理数系＋体育と技術家庭な感じ、人がよりにくいオーラがあるらしい。そのせいででもてないぜ……友達も少ないし家庭の事情も問題あり、正直いやになってくる。

日常はつまらない、それが俺の認識だった。

そして俺は今とても混乱している。原因は今の状況にある。

目が覚めたら見知らぬ天井＋布団で寝ているという経験はあるだろうか。

「ここは何処なんだ？」

確か公園のベンチで寝ていたはずなのだが？

少し状況を整理しよう、俺はコンビニで雑誌を立ち読みした、そして公園のベンチで鳩の群れを眺めているうちに寝てしまったのだろう。温かい夏の日差しは眠気を誘うから困ったもんだ、特に授業中。

じゃあこんなところに誘拐？いや、そしたら誰か周りについてるだろ、周りの様子を知るのが今は先決だ。

起きあがって探索を試みる、畳に障子とかなり和風の造りだ、賽銭箱もあるしどうやらここは神社のようだ、500円くらい入れてみようかな、ただでさえわけわからねえ状況なんだし神様に助けを求めても罰は当たらないはずだ。

外にでるとかなり長い階段がある。境内を一通り見て回ったが誰もいなかった、神主さんか巫女さんの1人くらいいてもいいと思うけどなあ。できればかわいい巫女さんきぼ……なんでもないです。外にでるとかなり長い階段がある。少し降りてみよう、神社には誰もいないみたいだし。長い階段の下には人が住む街が、と俺の中では相場が決まってるんだ。

……とはいっても降りても降りても先が見えない、どんだけ長いんだこの階段は。家の近くには絶対ねえぞこんな神社は……

それよりもだ、今ある理由で足を止めている。それは……

脇の林の中がゴソゴソ言ってるがなん……！！？

「なんだよこれ！化け物か！？」

なんだか熊みたいな得体のしれないものがある、こんな生き物動物園でも見たことないぞ！というかいたら困る、幼児とか絶対泣き崩れるに決まってる、そう、だってあいつは頭が二つあるんだから！しかもそのほかにもいろいろおかしいところ盛りだくさんだし！

しかも迫ってきてる、完全に狙いは俺だ、やっぱりこうゆう化け物には食べられるって感じなのか？そんな人生の終わりがたは御免なんだけどな！

となれば選択試は一つしかない。そう、神社へとにげること。

「なんなんだよこれは！」

必死に階段を駆け登る、いや、降りたほうが良かったかな？行き先がわからないよりは安心できるけど……

息が切れてきた、階段を登り終わったがもう走れない。俺はその場に崩れ落ちた。あの化け物も境内に入ってきてる。

奴は迫ってきてでかい爪のついた腕を振りあげた。もう絶体絶命だ……これで終わりか……

畜生！なんでもいいからあいつを吹っ飛ばせ！もうやけくそだ、どうせなら最後に神風特攻隊やってやらあ。

俺は無謀にもほどがあるが奴に殴りかかった、（チキッて目をつぶっていたがそれは内緒だ）

腕に奴の感触が来た……なんだかものが焦げる音がする、その前に俺は死んでない、いや痛みを感じる前に死んだのか？恐る恐る眼を開けるとそこには黒こげになったやつ死体がある…… why？誰がやったんだ？しかもどうやって、まさか俺……のはずはないよな。それよりもなんだか疲れた、すべてを出し切った感じがする、俺は猛烈な眠気に襲われた。意識がブラックアウトしてきた……もうだめだ、おやすみなさい。

目が覚めるとさっきと同じ部屋で同じ状況になっている。夢じゃなかったのか。

「何なんだよもう……」

「あら、目が覚めたの？」

起きたら巫女さんがお粥をもってこっちに来るところでした……待て待て、この人は誰だ？誘拐犯か何か？

「あの……あなたは誰でしょうか？というよりここは何処なんですよっ？」

「私は博麗霊夢、この博麗神社の巫女やってるわ、あなたは？見たところ外来人みたいだけど」

外来人？なんだそりゃ、いろいろ聞きたいけど名乗るのが先だ」

「俺は神依崎祠雷です、ところであの化け物から助けてくれたのはあなたですか？」

「霊夢でいいわよ、あとかしこまらなくていいわ、話しづらいし、それよりも助けるって何？私は森の中で倒れていたあなたを寝かせた、そして帰ってきたらあなたが妖怪と倒れてた、私はあの妖怪の片づけと祠雷の看病しかしてないけど」

「じゃああれはいったい何だったんだ？……っ！かあれ妖怪なんだ。」

「もう一つ聞くけどお賽銭入れてくれたのって祠雷？」

「そうだけどまずかった？」

「……いや目が輝きだした、お粥に卵が乗ったぞおい、態度がガラッと変わったな。」

「外の世界のお金は高く売れるし、もしよかったら来るたびに素敵なお賽銭箱に入れていっていいわよ」

「はあ、通貨違うんのか……というかここ何処なんだ？」

「ここは幻想郷、やっぱりあなた外来人だったのね」

「幻想郷？」

「あなたたちの住む世界とは別の世界、パラレルワールドというわけじゃないけど要は別の世界と考えてもらっていいわね」

「……戻れるのか？」

「戻るわ」

さらりとおれの希望になること言っな。

「じゃあ「ところでさあ」っ、何でしょうか？」

「祠雷は能力持ち？」

能力？なんのことだろう？サイコパワー……なんてな。

「だから、あの妖怪黒こげにした能力よ」

「人の心読むなよ、というか俺は何も知らん（チキって目閉じてたし）」

「私は神社のほうが一瞬光って、何事かと思えば祠雷が倒れてたんだから、間違いなくあれを倒したのは祠雷なわけ」

俺が倒したのか？よくわからんが今のが事実ならそうなることになる。

「面倒だからおんなじ状況作って調べるわ、さあ、外に行くわよ」

今さらりと恐ろしいこと言いませんでしたか！ちょっと……

言われるままに境内に来てしまったが、いったいどうやって調べるんだ……！ 霊夢が空飛んだよ！もしかしてここは常識のかけらもない場所なのか？もう早く帰りたくなってきた……

「今から私が弾幕放つから、とりあえず抵抗しなさい」

弾幕？だめだ、もう思考がおいてけぼりくらってる、というか弾幕つてどんな……

「おわ！なんだこれ、これが弾幕なのって人の話聞け！」

「いいから抵抗する、なんかしようとすればいいはずだから」

「はずってなんだはずって！」

あんなもの直撃したら腹に穴開くぞおい！いまはなんとかよけきつてるけど霊夢あれ絶対本気じゃないから！

「手っ取り早くいくわよ、霊符「夢想封印」！」

「ちょま、あかんからそれ！」

もうどうでもいい、そうだあの時はやけになって殴りかかったから助かった、でも空飛んでる相手なら殴れない、そしたらやることは一つ！

俺は霊夢に向かって思いっきり両手をかざす、そうすればなんとなるかもしれない、というかそれしか手段がない！

……今、俺は手から何を出した？まるで雷みたいなビームだったけど。

「やっぱり私の勘は当たったわ、あなたは雷を操れる、「雷を操る程度の能力」といったところかしら？」

手がバチバチ言鳴って電気が通ってる、雷だけじゃない。

「霊夢みたいに言うなら雷だけじゃない、「電気を操る程度の能力」ってとこかな」

程度のはつける意味あるのか？疑問だけどまあいい。

「ねえ祠雷、強くなりたくないかしら」

俺も中学一年生、力だのなんだのには憧れる年ごろだからだろうか、言ってしまったんだこのとき。

「ああ」

「外の世界に戻れなくなるかもしれないけど？」

それは困る……と思いつつも俺がいた環境はそこまでいいものだったか？

- ・ 1つ、両親が絶賛離婚中
- ・ 2つ、外見のせいなのか友達は極端に少ない
- ・ 3つ、今までの暮らしは特別楽しいわけじゃない
- ・ 4つ、つか思い返せば未練0

「今思うと戻る必要すらないかもな」

「帰らなくてもいいっていうこと?」

「ああ、いまさら帰る気も起きなくなってきた」

「決まりね」

「こうして俺の幻想郷での暮らしが始まったわけである。」

雷を操る程度の能力（後書き）

まず1話、読んでくださりありがとうございます。

誤字脱字、その他もろもろあれば指摘してくださいとうれしいです。

学生という立場もありますが更新不定期です、特にテスト前はそうなるでしょうがその点は容赦してくださいさると助かります。

これからもよろしく願います。

スペルカードを作ろう！
(前書き)

！ ？ の後に空白入れてみました、ちょっとは見やすくなったかな？

スベルカードを作ろう！

あれから3日ほどたった、博麗神社に住まわせてもらっている俺は家事全般＋雑用という面倒事を押し付けられる羽目になった。まあただ飯よりは確かに気は楽なだけだよ。

……とはいいつつもこの暮らしにもすぐに慣れてきた、霊夢のスパルタのおかげで生傷の数に比例して能力の使い方も成長しているのは自分でもわかる。まだ弾幕は出せないけどね。

昔から「強くなる」ということには昔からあこがれていた、サッカーだっけ始めたころは日が暮れるまで練習したものだ。

親戚は父さんに似た、なんて言ってくるがどうなんだろう？俺の父さんの記憶は剣道柔道空手合気道etc何でも来いの格闘家で、母さんいわく、なんでも国が持つてる武力団体にお呼びがかかってたらしい、そんなこと公にしているのか知らないが、一応戦争しないんだろ？日本は。

離婚して蒸発したのはそれにかかわることらしいけど詳しくは知らない、知る気もない。

ただ俺の性格は父さん似なのは確からしいが。

魔理沙っていう人にもあった、最初はここは魔法使いまでいるのか！なんて思ったがよく考えると、空飛ぶ巫女さんと妖怪がいる時点で何でもありなのは変わらない。

俺も空飛べるようになったら便利だろうな、速く飛べるようになりたいな。

魔理沙も「特訓に付き合ってやるぜ!」とか言っただけで弾幕ごっこ（かなり一方的な）をする羽目になったけど、ここは戦闘狂の集まりなのか? って霊夢に聞いたら大体あつてるとか言ってきたし。ほんとに何なんだよここは。

それはさておきだ、俺の能力についてわかったことがある。まず、電気のほかに強力な武器が見つかった、それは「光」だ。閃光手榴弾みたいな使い方ができる便利なもんだ。

それに電気なら携帯の充電から雷落とすまで、ほんとに何でもありらしい、もちろん限度はあるけどな。

「さてと、そろそろ霊夢が返ってくるかな?」

今日の特訓の始まりだ。

あれからさらに1週間がたった、結構忙しい一週間だったと思う。まず俺は人里に初めて行った、確かに俺の格好は目立つみたいで色々ジロジロ見てくる人もいた。イメージは上下黒ジャージにトレシ

ユーはいて江戸時代の町にタイムスリップした感じをイメージしてほしい。霊夢がいなかったらどうなっていたか……

能力の成長は霊夢いわくとんでもない速さらしい。弾幕もある程度出せるようになってきたし能力も上手に使えるようになった。そして霊夢に一発当てることができたのだ、それでも袖かすっただけだったけど。

そして今日はスペルカードたるものに挑戦するらしい。霊夢が返ってくるのが楽しみだ。そろそろ買い物から帰るころだし、今日の特訓が始まる。

「ただいまー」

噂をすればなんとやら、でっかい袋を抱えて霊夢が帰ってきた。

「なあ霊夢、スペルカードって何なんだ？」

気になって聞いてみた、これから習うことだしね。

「とりあえず外に行くわよ、話はそれから」

縁側に座りながら霊夢が説明を始めた。すると霊夢は白紙のカードを10枚ほど渡してきた。

「スペルカードっていうのは簡単に言うと必殺技みたいなもんなの」

「と言いますと？」

「たとえば私の夢想封印もスペルカード、見たことあるでしょ？」

「あれがスペルカードなんだ」

「それよりもまずはスペルカードルールについて知ってもらいましょう」

口調がいつの間にか先生っぽくなってきてるな。

説明が長いので俺が要約しよう。スペルカードルールとは要するに戦いのルールみたいなもので、みんなはそれを「弾幕ごっこ」と呼ぶらしい。

・まず勝ち負けの決め方、それはどちらかが被弾するかスペルカードを全部攻略されてしまうとそこで勝負がつくらしい。

・基本的に絶対によけられないようなものは反則で、それは普通の弾幕にもスペルカードにも当てはまる。

とりあえずこれだけ知っておけば大丈夫らしい。細かいことは後回しらしいが。

そして1枚のスペルカードにも弾幕ごっここのときの弾幕を出す使い方とそれ以外の能力を活用した使い方、たとえばおれだったら電気を使って高圧電流をばらまいたり、光を使ってフラッシュ！なんて感じらしい。

とにかく今日、俺のスペルカードを作るらしい、今はどういうものを作ったらいいか会議中だ。

と、そこへお客の登場だ。

「おーっす霊夢、遊びに来てやったぜ」

魔理沙が遊びに来たのだ。

「今忙しいの、手伝ってくれるんなら大歓迎だけどそうじゃないんなら適当にお茶でも飲んでて」

「忙しいって、二人して何してるんだ？」

俺は魔理沙に事情を説明する。

「なーんだ、そういうことならあたしも手伝ってやるぜ」

「いいけどパクるんじゃないわよ」

「失礼な、魔理沙様がそんなことするはずねーじゃないか」

「はいはい」

パクるって何だ？つーか前科ありみたいな話し方だったけど。

俺の弾幕は直線的だが、スピードもあって角々と曲がる、本当に雷のようだ。それをうまく使おうというわけだが、それだけじゃ物足りないのだからちゃんとほかのバリエーションのものも作るらしい。おれには光も扱えるので好都合なんだそうだ。

こうして3人で俺のスペルカードを作ることになった……………

そうして俺達は4枚のスペルカードを作った、魔理沙も帰ったしもう辺りは暗くなっていていたので夕食とすることになった。本格的な練習は明日から、明日が待ち遠しいな。

そして俺の光の能力は暗い所を照らせるために重宝されている、電灯も何もないため基本蠟燭とかだったらしい、金銭的に助かるらしい、そこまで家計は火の車だったのか……確かに参拝客見たことないけど。

まあ家計の事情を俺が気にする必要もない、俺まで養ってるんだから問題ないだろ。

さあ、明日が楽しみだ。

スペルカードを作ろう！（後書き）

スペルカードの方は次回にさせていただきます、しばしのご辛抱を。

魔理沙との出会いを省略しました、ファンの皆様ごめんなさい！
うまく書ける自信がないんです、いやほんとに。

誤字脱字、その他もろもろありましたら指摘してくださいと助かります、どうか次回も見てくださいとうれしいです。ではこの辺で。

スペルカードを作ろう！その2（前書き）

今回は結構展開飛ばしてましたね、正直やりすぎた感があります…
…いや、ちゃんと反省してますよ。

今回はスペルカード一挙公開です。

スペルカードを作ろう！その2

朝起きたら霊夢は出かけていた、机には『魔理沙のところに行ってるから待ってて』という置手紙、まさかギャラリーに入るのか？緊張してくる、霊夢も初めてスペルカード作った時はこんな感じだったのかな？ たぶん違う気がしてきたけど。

スペルカードの名前ってやっぱり厨二っぽくした方がいいのかな？ 若干それ要素入ってるけど。個性が出ると思っただよね、いや、俺個人の感想なんだけども。

テーブルになんかメモがある、内容は……「魔理沙のここに行ってくる」

「ps、言い忘れたけど、今日は本気出すから覚悟してね」

……おいおいちょっと待て、本気出すって言ったって今まで手抜きだったってことだろ。本気なんな出されたら俺しんじやうぜ？

いや、こんなこと言ってる暇があったらさっさと霊夢に対抗する方法でも考えなきゃな。

お賽銭入れとこ。

「ヤッホー祠雷、晴れ姿を見に来てやったぜ」

魔理沙だ、晴れ姿も何もぼろぼろになって雑巾もどきになった姿しか見れないと思うが。

「ん、ちよつと待て、霊夢はどうした霊夢は」

「置いてきたぜ」

「いや置いてきたじゃなくて」

「ちよつとばかり飛ばしたんだぜ」

「魔理沙ってそんな早いのか？」

「幻想郷の中でも天狗の次に早いぜ」

「そうなのかー」 「キャラが被るからやめてほしいのだー」

「今何か聞こえた？」

「いや、それよりいいもんやるよ」

そう言つて魔理沙はスペルカードを取り出した。

「マスタースパークをちよつくら改造したんだぜ、祇雷にぴったり

のカードなんだぜ」

「もらっていいのか？」

「そのために昨日徹夜したんだし、特別にタダなんだぜ」

「普通なら金とんのかよ、まあとりあえずどんなもんなんだ？」

「使ったらわかるんだぜ」

なんか不安だな、おい、使ったら花火が出るとかいう落ちはごめんだけど。

「そんなことはないんだぜ、信用していい物だぜ」

何でこの連中は声に出さないことが聞こえてんだよ！

「秘密だぜ」

「だゝ、もういい……！ 霊夢が来たぞ」

霊夢が飛んできた。

「二人して何してんのよもう、魔理沙も本棚倒すなんて古いやり方してまで来たんだからなんか二人してたくらんでんのはわかってんのよ」

本棚倒した？まさか下敷きにしたのか……魔理沙も鬼だったな、これ。

「それはいいとして、祠雷と今日は本気の勝負よ、たぶん怪我しないと思うけど」「いや絶対無事じゃ済まないからね!」「気をつけるように」「スルーかよ!」

「さあ準備はいい?」

そう言つて霊夢は高く飛びあがり、スペルカードを構える。

「畜生、もう何でも来い!」

俺もやけくそになつてスペルカードを構える。

先に手を出したのは霊夢だった、俺だつて伊達にスパルタ受けてない、このくらいなら……

「本気で行くわよ、覚悟はいい?」

……! 一気に弾幕が早く、厚く、複雑になる。けど大丈夫、俺には見える、この一週間チヨイで練習したんだから。

こつちからも反撃だ、いけ! 俺の雷弾幕。

霊夢は軽くよけながらいった。

「様になつて来たんじゃない、でもね、まだまだ甘いわよ」

そう言つて霊夢のスペルカード発動。

『霊符「夢想封印」』

なんちゅう弾幕だよまったく、こんなの避けれなんて鬼畜にもほどがある。

さて俺も行きますか、スペルカード。目には目を歯には歯をだ。

『雷光「稻妻柱の大封絶」』

霊夢を取り囲むように弾幕の雷が落ちる、そこから跳ね返るように霊夢に向かっていく弾幕……畜生、造作もなく避けられた。

どっちもスペルブレイクだ。

「次は俺からだ！」

『光撃「スタンフラッシュ」』

「ッ！」

閃光がほとばしる、目がくらんだ霊夢に祠雷が全方位にばらまいた弾幕が襲いかかる。

霊夢は作るのには協力したが中身は知らない、完全に意表を突かれた。

「もういっちょよ、『雷符「雷様の大名行列」』！」

意外と行ける、そう祠雷は思った。尤も勝つのは望み薄なのも理解していた。魔理沙のスペルカードを気にかけてはいたがイレギュラーで得を得るのはもともと勝ち目の薄いこちらであるのは確かだが。

周りに弾幕を降り注ぎながら直進する幾つもの大きな弾幕。上とい
う上のあらゆる方向からくる弾幕は大きな脅威であった。

「これは手ごわいわね、『夢符「封魔陣」』！」

弾幕が消える。そのすきに霊夢の弾幕が来る。

こっちに向かって曲がって来る、これはよけるのつらいな、けど俺
だって腹に穴開くのは御免なんだ！

「当たればいいが……『電撃「ボルトナックル」』」

正直無謀なスペルカードだ、自分が直接近距離まで寄って弾幕をほ
ぼゼロ距離で叩きつける。

弾幕消しの効果をつけてみたが（魔理沙の入れ知恵だけど）どうだ
ろう。素直に通るかな？

俺は飛び上がる、少しなら俺だって飛べるんだ、すぐ落ちるけど。

「この状況で突進ねえ……やられるつもり？」

あっさりよけられる。けど本命はこっちじゃない！

「馬鹿言つな！ 喰らえよくわかんないやつ！」

「言い方がひどいぜ、せつかくのプレゼントなのによくわかんない
やつ扱いされたぜ」

今自分でも驚いてる、使っておいて何が起きてるのか分からない。
いや、全力で使ったから疲れてきた。それどころじゃない。体の力

が抜ける、あの妖怪と戦った時と同じだ。うつ、意識の混濁に逆らえない……もうお休みだ……

「まったく、あんなに強力なの作ってやったのに全力出すからこうなるんだぜ」

空中で祠雷を受け止めた魔理沙はため息をつく。

「もう少し信用してほしいんだぜ」

「あれ作ったのあんたなのね、まったく、どういつつもりなの？」

「ちょっと祠雷に肩入れしただけだぜ」

「私も疲れたし、休みましょうか」

お茶を用意し始めた霊夢、ふと気になることが頭に浮かぶ。

「そつえば、あのスペルカードの名前はなに？」

「決めてないんだぜ」

「無責任なんだから……」

こうして俺の地獄は終わった……

スベルカードを作ろう！その2（後書き）

今回も読んでくださってありがとうございます。

ああ、文章力がほしい……読みずらかったらいつてください。これから生かしたいと思います。

スぺルカードを作ろう！その後（前書き）

紅魔館フラグ立ててみました、テスト前なのにこんなことしていいんだろっか？

スperlカードを作ろう！その後

「僕、将来お父さんみたいに強くてかつこいい人になる！」

これは……俺の夢か？ また懐かしい夢だ。あの頃は俺も純粹だった。ただ憧れしかもっていなかった。

「そうか、なら父さんと一緒に特訓だな」

覚えてる、あの笑顔、思えばあの頃からだった、強くなって、誰よりも上に立って、父さんみたいになるって思い始めたのは。なんだかんだいって好きだったんだな。ひねくれてんのは俺のほうか。

今の俺が父さんに似てるってのは確かにあってるのかもな……

「いつか父さんより強くてかつこいい人になれよ」

いつから嫌いになったんだろう、いなくなってから？ そうかもしれない、誰だって勝手にどっかに消えてった、自分の都合で放り出したやつを好きでいられるか？ 俺は無理だ。

何自問自答してんだろ？ 今はあいつより強くなって見返してやろうとしか思えない。

だから頑張れてんのかな？この天の邪鬼は……

……頭が割れるように痛い、ここは博麗神社か、たしかスペルカード使って、力使い切つて。

「あら、案外早く目覚めたわね」

「霊力使いきつといて、立ち直りの早いやつだぜ」

「俺はどんくらい寝てたんだ？」

「3時間くらいかしらね」

「以外に気絶してたんだな。つーかどんくらいが普通かわからんけど。というか解りたくもないけど。」

「それはそうと、祠雷に決めてほしいことがあるぜ」

「決めてほしいこと？」

「あのスペルカードの名前だぜ」

確かに名前決めないとかつこ悪いしな。

「それにスペルカード使うときは使うスペルカードの名前を宣言するんだぜ、それがルールなんだぜ」

「つまり決めとかないと使えないわけか」

「そういうこと、魔理沙があんたに押し付けただけなんだけど」

「まあ、とりあえず名前だが……なんか参考にできないかな？」

「マスタースパークを改造したんだぜ」

一回だけ見たことあるな、初めて会った日に。
あれを改造して……

「その前にどんなもんなのか俺もよくわかんない」

自分も理解できなかったわけですよ。何が何だか。

「マスタースパークの規模を小さくしてとりあえずそこらじゅうに
所かまわず撃つんだぜ、あと若干軌道修正したり、曲がったり移動
したりするから、結構よけずらい用になってるぜ」

やっぱり改造したんなら本家の名前を入れるのが筋だよな。

「やっぱりマスターかスパークのどっちか使うのが礼儀か」

「とりあえず魔理沙さんには秘密兵器があるんだぜ」

そう言つて魔理沙が取り出したものは……外の世界のゲームの攻略
本、見たことないようなマイナーなゲームだなおい。

つーかなんで持つてるんだろう？

「何それ？どっから盗んできたの？」

「盗むとは失礼な、パチュリーから死ぬまで借りるだけだぜ」

それ盗むのと同じだよな、つーかパチュリーって誰だ？
まあそのうちわかるとかしか言われないんだし、別にいつか。

「とりあえずその攻略本から名前をパクると」

「何かかつこいい名前がたくさんあるぜ、ほら」

そう言われて中を覗く、手始めに魔法一覧でも……おつ雷属性一覧か、期待できるかも。

「サンダー」敵一体に雷を落とす

「ライトニングボルト」激しい雷が敵一体にダメージ

「スパーク」敵一体に雷属性のダメージ

……手抜き臭すぎる。もうチヨイましな名前はないのか。とはいいつつも俺だってサンダーサンダラサンダガしか言えねえけど。

「シャイニングスパーク」周りの敵に放散するような雷攻撃

何かぴったりなのがある！

「これなんかどうだ、効果までぴったりだ」

「よくわかんないけどかつこいいからいいぜ」

そうか、こつちにはゲームがないのか。

「あら、以外に普通のが出てきたわね」

「いや、何かわからんけど強そうだぜ」

「『雷符「シャイニングスパーク」』 なんてどうだ？」

「いいと思つぜ」

「まあ、かぶってるのはこの際どうでもいいのかしら」

「気にしたら負けだぜ、霊夢」

かぶってる？ 誰とだ？ まあそれよりも今は重要なことがある。

「なあ霊夢、腹減ったんだけどなんか作るもんなるか？」

「それならお昼ごはん残ってるから適当に食べなさい」

「センキュー……野菜しか残ってねえ、まあいいか」

紅魔館では。

「咲夜、なかなか面白い外来人がいるみたいね」

「面白い外来人といいますと、この前魔理沙が言っていた博麗神社に住んでいるという人でしょうか？ 名前は確か……」

「神依崎祠雷、なかなか見込みがあるわ、今すぐにも見に行きたいんだけど」

「すぐに用意をいたします」

そう言って咲夜はどこかに消えた、レミリアは。

「少し手合わせしてみたいものね」

そう言っつて紅茶を飲みほした。

「で、あんたはいつまで居座る気？」

「もちろん、気が済むまでだぜ」

「あきれるわね」

「あら、こんな時間にお客さんだわ」

「こんな時間って……まだ昼間だぞ」

「だからよ」

だからよって、どういうことだよ。

「まあ、直ぐにわかるぜ」

どうも納得できない。ここでは常識のかけらもないのは知ってるがどうもなじめん。

「遊びに来たわ、霊夢」

そう言って入ってきたのは……幼女？

「どーせこいつが目当てなんでしょ」

「あら、鋭いわね。まあ当たり、だって面白そうじゃない」

見た目と反するしゃべり方だな、まあ人じゃないんだろう。

「お嬢様」

「わかってるわよ、私はレミリア・スカーレット、あなたも予想がついてると思うけど人間じゃないわ」

「祠雷、こいつは吸血鬼よ」

吸血鬼……ここはほんとに何でもありだな。

「あの……そちらの方は？」

なぜメイド服なんだろう？ お嬢様とか言っただけでつかい屋敷に

でも住んでるんだろうか？

「私は十六夜咲夜と申します、紅魔館のメイド長です」

紅魔館？ それがこの人たちの住んでる所か。

「ずいぶんと丁寧ね」

「あら、初対面の人には丁寧に話すものよ」

「あんたが言えることが。で？ 何の用で来たの」

「なかなか面白そうな外来人じゃない、能力もちだつて？」

「まあそうね」

「なかなか見込みはあるぜ」

「何の能力かしら？」

「あっはい、「電気を操る程度の能力」です」

びっくりした、いきなり話を振られたな。

「電気ねえ、香霖堂につれてつたら喜ばれそうじゃない」

「それは考えてるわ」

「あいつんとこの機械動かしてやったらどんな顔するか楽しみだぜ」

何か蚊帳の外なんだけど……どうしよう。

「咲夜」

「はい」

！ 咲夜って人も能力もちなのか、瞬間移動としか思えない、一瞬で出てきたな、今。

しかも紅茶……やっぱりメイドらしいことしてんのかな。

「そう言えば祠雷に何の用なの」

「ただ顔を見に來ただけよ、あとはどのくらい強いのか聞きに來たつてところかしら」

「あんたのこの門番ならいい勝負になるかもね」

「そう、わかったわ。今日はもう帰りましょう、咲夜」

そう言っレミリアは出て行った、思っただけど日傘だけで日の光が平氣になるなんてチートだよなあ。持つてるのは本人じゃないけど。

「そのうち紅魔館に來てね、いつでも招待するから」

これは俺に向けたメッセージか。吸血鬼の住む館ねえ、どんななんなんだろ。

「おっ、咲夜のやつが珍しい、ティーカップ忘れてってるぜ」

「明日にでも届けばいいでしょ、今から行くのだからいいじゃない」
祠雷も連れてけばいいじゃない」

また俺だけ蚊帳の外のまま話が決められた……早速行くことになり
そうだなこれは。

スペルカードを作ろう！その後（後書き）

次回から紅魔館編です、変なところあったら指摘お願いします。

ちなみに本編に出てきた攻略本は適当に作ったものです、ソースはありませんww

紅魔館へ行こう（前書き）

結構読みづらいかも。まあよろしく願いします。

紅魔館へ行こう

俺は今、とてつもない恐怖体験をしている。それは……

「魔理沙！ もうちょイ、もうちょイ速度落とせ！」

「こんなんデビってちゃ幻想卿最速になれないぜ」

「なる気ないから！ほんとに頼むって！」

「箒に乗った時点であきらめるんだな」

俺は今魔理沙の箒に乗っかっているわけだが、どうしてこうなったのかというと――

話は20分前。

「さて、そろそろ行きましょうか」

そう言って霊夢は飛び立つが。

「ストップ！俺まだ飛べないから。そりゃあ20mくらいは飛べ

るけどさ」

「ああ もう、面倒くさいわね。仕方ないから歩いて行くわよ」

「おい霊夢」

あれ？ 何で魔理沙がここに？

「何であんたが来るのよ」

「こんな面白そうなことほっといたら一生後悔しそつだぜ」

「あんたらしいわね、いいけどこれから歩きよ」

「——は？」

「いや、俺が飛べないから」

「なるほど、ならば話は早い、箒に乗せてやるぜ」

箒ねえ、いや、乗ってみたくないわけじゃないけど。

「いいのか？」

「別にいいぜ」

「それならお願いしようかな」

「よし、だったらとっとに乗った乗った」

——乗ったのはいいけど仮にも女の子の肩につかまって、とかはどうもなあ。同性と手をつなぐこともめったにないのに。話すことだって。

「覚悟決めなさいよ」

ん？ 今の霊夢の言葉は一体どついう意味ん

「落っこちなよ」

そして今に至る。

「おっ、見えてきたぜ」

「だったら落とせ！」

「いけねえいけねえ、今日は図書館じゃねえんだ」

地獄が……終わった。

「祠雷、生きてる、意識ある？」

「なんとか」

「そう、よかった」

改めて周りを見渡してみる、あるのは門だけでも。つーかあそこで寝てる人誰？

「美鈴ったらまた寝てるのね」

そう言つて霊夢は美鈴さん？ の額を突つついた。

「……ふああい、！ いや、今のはですね寝てたんじゃないんですその」

「あんたは何言つてんの？ 正氣に戻んなさい」

「あつ、何だ、咲夜さんじゃなかったんですか、いやゝびっくりさせないで下さいよ」

「だったら居眠りやめなさい」

「厳しい……あれ？ そちらの方は？」

「あ、神依崎祠雷です」

「私のとこの居候」

「じゃああの噂の外来人さんですか」

噂つて、もしかして俺のこと結構広まっていたりするのかな。

「あつ、一応外来人です。ところであなたは……美鈴さんでいいんですか？」

「あつ私は紅魔館の外回りを担当してます、紅美鈴と申します」

何か中国人みたいな名前だな。

「何か失礼なこと考えてませんか？」

「いえ、別に。ところで噂ってどんな風なうわさで……」

「ああ、博麗神社になかなか強い外来人がいるって、人里でも広まっていますよ」

根も葉もないうわさが広まってるな、おい。俺のこと見たらがつかりするぜ、きっと。

「で、噂の話はいいからとっとに入れてほしいんだけど」

「そう言えば今日はどうしてここに？」

「咲夜が忘れ物してつたのよ、届けに来たわ」

「はゝそれは珍しい、咲夜さんもそんなことあるんですね」

そう言つて美鈴は門を開けた、よくよく見てみると紅魔館つてすんげえ立派な建物なんだな、外の世界じゃめつたに見れねえぞ、これ。

「行くわよ、早くしないと片づけちゃうじゃない。」

「何を？」

「何のためにお昼時に来たと思ってんのよ」

「たかるのか」

「何か悪いの？」

いやな予感がしてきた……

「いや、別に文句とかはないけど」

そして俺は美鈴さんに聞いてみる。

「あの、美鈴さん。もしかして霊夢って結構昼飯たかりに来てるんですか？」

「さんなんかつけなくていいですよ、まあそうですね、特に冬場は多いかもしれません」

常習犯か。つーかそれでいいんだろうか、もしや本命はそっちとか。

「あつ霊夢に置いてかれる、それではまた」

「大変ですね、祠雷さんでしたっけ」

そして玄関の前で俺は気づいた。魔理沙がない。いつの間にとっか行っただのか。

「霊夢、魔理沙は何処行つた？」

「どうせ図書館に本盗みに行つたんでしょ」

盗みつて……あいつは何やってんだか、まあ何となく本性わかってきた気がする。

どうせ死ぬまで借りるだけとか言ってるんだろう。

「おい霊夢、勝手に入っていいのか？」

「別にいいのよ、いつもそうなんだし。咲夜ーいるんでしょー」

「あら霊夢じゃない、今日は何の用？」

うーん、どうもこの突然現れるのには慣れない。

「ほら、あんた忘れ物してつたわよ」

「あら、気付かなかつたわ」

そういつてまたすぐ消えていく。時間を止めてるらしいが。率直な感想を言つとこの人は従者の鏡だな。苦労してる姿を誰にも見せない、どこことなく懂れる。

でも霊夢と話すときは結構普通の話し方なんだ。仕事モードとかあるのかな？

「咲夜、お昼ごはん余ってるんでしょ」

「やっぱりそっちが目的なのね」

うちの巫女にも見習ってほしい。

結局ご馳走になってしまった。おいしそうなものを見るとついにお腹の音が……

そういう問題でもない気がする。

「おつす祠雷、昼飯は済んだのか？」

魔理沙だ、手に持ってる本は図書館とやらの本か。

「まあ、もう食べたけど」

「よし、ご馳走になるとしますか」

思考回路を見てみたい。

でも図書館……やっぱりでかいのかな？ 興味はあるけど――

「霊夢、図書館ってどこにあるの？」

「咲夜にでも案内してもらいなさい」

「それは悪いだろ」

「あら別に構わないわよ」

いつの間にいるんだよ、もう。心臓に悪い。

「いいんですか？ そんな道さえ教えてくれればいいんですけど」

「私がついてった方が話が早いだよ」

「じゃあ私は魔理沙とくつろいでるから、あつ、そうそう今日はここに泊っていくことにしたから」

……話について行けない。

「お嬢様があなたに興味があるらしいのよ、帰してしまったら後が怖いわ」

興味があるねえ、どんな意味でだろ……ちょっと寒気がしてきた。

「まあそれだけ時間があるんだし、図書館でも探検してきなさい、外の世界の本もあるみたいだし、結構広いから退屈はしないはずよ」

それは魅力的だな。

「案内するわ、ついてきて」

「あつ、はい」

一言感想、広い。

いや、この大きさの図書館なんて外の世界にもねえよ、全部読むのに千年単位でかかりそうなくらいの大量の本。どうやって集めたんだろうか？

「パチユリー様、例の外来人でございます」

「ああ、レミイが言ってた人ね。どつかのコソ泥ネズミみたいなことしないんなら別に好きに見ていくといいわ」

「じゃあ、伝えておきますわ」

「そうね、小悪魔にでも案内させたらどうかしら。もっじき戻ってくることだし」

「わざわざいいんですか？」

「いいのよ、迷子になられても困るし」

「パチユリー様、お茶ですよ」

「ほら、言った通りじゃない」

「あれ？ お二人で何の話ですか」

そう言つて小悪魔はティーセットと抱えた大量の本を置いた。

「これ頼まれてた本です」

「そう、小悪魔、今暇かしら？」

「はい、何か用ですか？」

「レミイが言つてた外来人いるでしょ、図書館を案内してあげて」

「はい、いいですけど」

「じゃあお願いね、レミイのお気に入りらしいから迷子になって全員で探す、なんてことないようにね」

咲夜さんにはここで待つてつて言われたけど……あ、戻ってきた。

「祠雷、もう少ししたら案内してくれる人が来るから、もう少し待つてて」

「案内の人？誰ですかそれ」

「正確には人じゃないけど、まあこの司書ね。それと私に畏まる必要はないのよ。霊夢だってそうじゃない」

「はあ、じゃあありがとう、でいいのかな？」

「その方が楽だわ、それじゃあね」

そう言ってどつかに消えてしまった、でもため口ってなんかなあ。

「あっそうそう小悪魔」

「なんですかパチュリー様」

「一通り案内する前に私の所に連れてきてちょうだい」

「わかりました」

ん、誰か来た。

「はじめまして、私はこの図書館の司書をしております、小悪魔

と呼んでください」

……小悪魔ねえ、漫画の世界から出てきたような悪魔だな、羽とかなんか可愛い形してるけど。

「こちらこそはじめまして、神依崎祠雷といいます」

「あの、案内する前に、突然なんですがパチュリー様に先に連れてくるように言われていて」

「パチュリーさん、ですか？ そちらのかたは誰なんでしょうか？」

霊夢とかがちよくちよく名前だしてたけど。

「まあ、私の主だと思って下されば」

「そうですか」

ますますどんな人かわからなくなった気がするけど。その前に人なんだろうか？

「あの、一旦パチュリー様のところへ……」

「別にいいですけど」

「でしたらこちらですので付いてきてください」

「はい」

これは変なフラグとかじゃないよな……突然お呼びがかかるなんて。
なんか不安になるよな、この状況。

紅魔館へ行こう（後書き）

テストが2つの意味で終わりました。

うちの国語の先生に伝説があるんですよ、前の学校で平均点28点のテスト作って保護者から苦情来たっていう無駄に要らない伝説がww80取ればヒーローですよ、ほんとに。

私情失礼しました。

紅魔館編に突入しました。実は咲夜さんファンなんですよ。↑関係ないです。

もちろんただでは済みません。でも次はいったん主人公のプロフィールとかまとめてみたいと思います。

ですが感想でもあったんですが主人公の家族関係とかはあまり触れないようにお願いします。あとから詳しくわかっていくんで、特に父親との関係は。

回想で少し出てきたと思いますが気になる場所があっても気にしないでください。

プロフィール（前書き）

オリキャラですのでやはり少しはまとめておこう。
というわけです。

プロフィール

主人公プロフィールです。

・名前 神依崎祠雷 ・性別 もちろん男です。

・年齢 13歳

・身長体重 155cm 43kg

・特技 木登り サッカー ブラインドタッチ

子供のころから父親に格闘技は教えられていたので柔道、空手、剣道は一通りできます。

プロレス技もある程度は。

・趣味 ガンマニアでほとんどの銃は見ただけで特徴その他が言える。

父親仕込みの射撃の腕前。一通りの実銃は使いこなせる。何気に気に入っているものは設計図まで暗記しているほど。自分好みに改造するのはお手の物。

・外見 目つきが悪いため睨んでいると勘違いされがち、そのせいかクラスメイトもあまり寄りつかない。

問答無用で人を近付けないオーラがあるが本人はそんな気

はない。

顔つき自体はかつこよさで言ったら偏差値55程度。

・性格 自問自答が多い、勘はかなりいい方で本人も自覚している。誤解されがちだが別に冷めた性格でもなく冷静にものを見られるだけ、客観的なところも。

しかし一度取り乱すと戻れないところもしばしば。

空気を読むことに関しては一級品。その場の雰囲気から何も言われなくてもある程度は読み取れる。

・服装 黒い服しかもっていない、それは明るい色が似合わないのを自覚しているため。

ジャージにトレシューは標準装備。

・能力 「電気を操る程度の能力」

電気なら携帯の充電から雷まで。さらには電気信号まで。

本人が気づくのは少し先だが。

光に関してはそこまで複雑には扱えない、せいぜい付属品程度。

理数系に関しては独学で教師をも圧倒する博学で能力も本人とは相性がいい。

スペルカードに関してはまだまだ修行が必要。

弾幕もまるで雷のように動かせるが、まだまだ修行不足。

プロフィール（後書き）

こんな感じです。ちなみにですが友人関係はほぼゼロです。

これからどんどん新しいことが分かっていきますので本文の内容だけではありませんが。

次回からは本編に戻ります。

弾幕ごっこですか……（前書き）

紅魔館編の続きです。

流れとかちよつと無茶してるかも。

弾幕ごっこですか……

「パチュリー様、よろしいですか？」

「入って」

小悪魔に連れられてパチュリーという人？ の部屋まで来たが……
見かけは普通の女の子だな、パジャマみたいな服装をして本を読んでいる。

「パチュリー様、こちらが神依崎祠雷様です」

「あの、様なんでいいですから普通に名前で呼んでくださると」

「ああでしたら私のことも霊夢さんたちとおなじように話しかけて下さい、祠雷さん」

でもさんはつくんだ。まあいいけど。

「もういいかしら」

「あつ失礼しました、祠雷さん、こちらがパチュリー様です」

何か淡々とした話し方だな、俺ってこんな風に見えてたのかな？

「はじめまして、あなたは祠雷でいいのよね」

「はい、こちらこそはじめまして」

「早速だけど少しいいかしら、これが終わったら好きに図書館の中を探検していいから、小悪魔、もういいから後でまた来て」

「はい」

そう言つて小悪魔が出て行ってしまった、正直気まずい。

「あの、俺に何の用でしょうか」

「あなた外の世界から来たのよね」

「ええ、まあ」

「外の世界の本で調べ物をしたんだけど、専門用語が多くてね、解説してほしいところとかがあるのよ」

「ああ、でしたら手伝いますよ。どんな本ですか？」

「これとこれとこれなんだけど」

そう言つてパチュリーが見せてきたのは、理科関係についての本だった、これなら俺の専門分野だ、確かにいきなり言われてもわからない言葉もあるだろう。お任せあれだ。

「じゃあまずこの本からお願い」

「ああ、まずここですか？ これはですね……」

「そういうことね、ありがとう、もう大丈夫だわ」

「じゃあ俺はこれで」

……待てよ、いつの間にか友達みたいに話してるんだけど、まあこれ1時間話してたらそうなるもんなのかな。

しかし懐かしい、昔は勉強大好きでこういう本でよく勉強したものだ。

そして本のページをめくっていくと気になる単語が。それは――

『電気信号』

これは、もしかして俺の能力で電気信号を操れば動きを封じたりと
かできるんじゃないか？

修行できる機会があったらしてみよう。当分先になるかもしれない
けど。

「もうじき小悪魔が来るから、まってて。」

「わかった」

やっぱり普通にため口になってる。まあ親善の証ということぞ。

「祠雷さん、おまたせしました」

お、小悪魔が来た。

「じゃあなパチュリー」

「それじゃあね」

そうやって俺はパチュリーの部屋を後にした。

「ずいぶん仲良くなりましたね」

「結構真剣に話し合ってたからなあ」

「うらやましいです」

「そうか？」

「はい、私なんて最初は全然相手にされなかったんですよ」

そうだったのか、皆いろいろ大変なんだな。

「それはそうとどんな本が読みたいんですか？」

「やっぱり外の世界の本とか」

「じゃあこっちはです、ついてきてください」

気がついたらもう夕食時だったのか、咲夜が迎えに来てくれた。

俺がテーブルに着いた頃にはもう皆揃っていた。

「最後のゲストの登場ね」

霊夢なんか早く食べたそうにしている。レミリアさんって普通のもの食べるんだ、吸血鬼なのに。

「それじゃあいただきますしょうか」

やっぱり今まで食べたことない味だ、霊夢がたかる気持ちも今ならわかる。

「そついえばお嬢様、今日は何で私も一緒なんですか？ いつもは門のところで食べてるのに」

美鈴さんって門の所でご飯食べてるのか、仕事熱心なのかわからん。

「ああ、それはあなたにも関係ある話があるうからよ」

話って何だろう？

「霊夢、あなた祠雷の実力をうちの門番ならいい勝負にはなるかも
って言ったわよね」

「ん？ 現にやりあえる実力はついてると思うわよ」

いやな予感しかしねえ！

「祠雷はまだ素人よ、でも実力を見ておきたいのよ。だから二人の
弾幕ごっこを見たいってわけ」

「え、あの、ちょっとm」

「いいんじゃない」

いや霊夢、簡単にいいとか言わないで。

「あら、面白そうなこと言うわね」

パチュリー！ 頼みの綱は……小悪魔くらいか。

「そんな、大丈夫なんですか？」

ナイス小悪魔！

「祠雷なら大丈夫だぜ」

……

「私は別にかまいませんけど」

これは……逆転不可だろ。

「決まりね」

場所は紅魔館玄関前、ギャラリーは夕食のメンバー。

「ところで祠雷さんはスペルカードとかあるんですか？」

「あ、5枚ほど」

「うーん、それじゃあ勝負になりませんねえ、どうしましょう」

「スペルカード無しでいいんじゃない？ 5枚はさすがにジリ貧よ」

「それだ！ そうしましろう祠雷さん、そうしたら公平です、いいですよお嬢様」

「別に構わないわ」

「では始めましょうか」

「はい」

しかし、そんなルールは意味がなかった、なぜなら……

「ハア！」

美鈴の上段蹴りを両手についてしゃがんで避ける、そしてそこからの足払い。

それを美鈴は後ろに避けて、起き上がりかけている俺に強烈な右フックを繰り出した。

俺はその手をつかみ背負い投げへと派生させる。しかし美鈴は途中で俺の手を振りきり地面を転がって距離を取る。

そこへ追い打ちをかけるように踵落としをするが、横によけられ顔面狙いのストレートで返される。

俺はバク宙で後ろに跳びつつ美鈴の拳を蹴って距離を取る。

「やりますね」

「それは俺のセリフだ」

そつ、途中から弾幕関係なしの格闘勝負になってしまったのだ。

「うーん、ガチで殴りあったら勝てる気がしねえぜ」

「それは私のセリフよ、あんなに動けたなんてね」

だめだ、やっぱり体力が違う、でも俺だって伊達に鍛えてないぞ！

俺の十八番の決め技をかける、空中回転からの踵落としだ、とはいっても素直に当たってくれるほど甘くはない。

美鈴も着地の隙について正拳突きをしてくる、横に回って回避する、まわってばっかで目が回ってくる。

「咲夜、どう見る？」

「とても13歳の人間には見えませんね、能力抜きに美鈴とやりあえるのは。ただ……」

「手がもう少し長ければもう少し選択肢も広がるのに、もったいな

いわね」

「それでも格闘技に関してはかなりの英才教育を受けていますね。種族を超えた実力を持っていますし、見ていても隙と呼べる隙がありません」

「なかなか面白いじゃない、本当に見込みがあるわ、私のものにしてしまいたくらい」

「だめですよ」

「わかってるわよ」

牽制変わりのパンチを入れる、美鈴はフックで返してきたが読み通りだ。

空を切った美鈴のパンチは体重を大きく前に傾けた。

「隙あり！」

低い姿勢のまま両手をつき、腹に蹴りをれた。

「ッー！」

苦しそうに顔を歪ませる美鈴に追い打ちの回転蹴り。勝負ありか。

「勝ったわね」

「美鈴も格闘技だったら十分な實力はあるはずですが、手を抜いたわけでもないみたいですし」

「本当に面白いじゃない」

「うう、さっき食べたご飯全部出しそう」

「疲れた、汗だくだよもう」

「今日はいいもの見れたし、ついてきて正解だったぜ」

「紫も多分どっかで見てるんでしょうね」

「どっかの天狗に隠し撮りとかされてたりしてな」

「あり得るわね」

その後、俺は風呂に案内され、部屋にも案内された。
そして高級ホテルみたいな豪華さでビビって逆にくつろげなかったりした。

そして就寝。

ベットがふかふかだー、とかやってるうちに寝ちゃったらしい。
疲れてたのかな、やっぱり。

ああ、今日も一日大変な日でした――

弾幕ごっこですか……（後書き）

フランちゃんは自室待機です。

いや、出したかったんですよ、ほんととは。

まあ次の機会に。

なんとなく次の回の冒頭が見えてきてる方も多いのではないでしようか。

まあ、テストも終わったので早めに出来上がるとは思っていますが…

…

いろいろある日（前書き）

風邪ひいてもうた、初雪もあったし寒くなってきたからかなあ。

サブタイトルはそのままです、はい。

いろいろある日

『噂の外来人、紅魔館の門番に勝利!』

どうしてこうなった。

「撮られてたのね」

この文々。新聞というものは天狗が発行している新聞らしいのだが。

「この内容はオーバーすぎるだろ」

「半分はでたらめなのは皆知ってるから大丈夫よ」

紅魔館から帰ってきて一息ついていたところの全然好ましくない二コースである。

「でたらめにも程がある」

「いい勉強になったじゃない、この新聞は信じてはいけませんって」

「なんだかさつきからひどい言われようですね」

ん？ 今のは誰の声だ？

「どうも幻想郷の清く正しいブン屋こと、射命丸 文です。今日は

噂の外来人さんに取材に来ました」

……

……

「はあ」

「あつ、今溜息つきましたね、聞きましたよ！」

そこには黒い羽のペンを持った女の子がいた。

「帰りなさい」

「ひどいですよ、お話くらい聞かせてくれても」

「祠雷、こいつの笑顔は営業スマイルだから騙されたらだめよ」

「私の印象どんどん悪くしてませんか」

「よくわかったわね」

いまいち展開について行けてない。要するにこの人は何なんだよ。

「それでお話を聞かせてもらえないでしょうか」

「あの……とりあえずあなたは射命丸さんでいいんですよね、とりあえずお話とは？」

「取材ですよ取材、明日の文々。新聞に載せる記事にするんですよ」

こいつが犯人か。

「あんなでまかせ書いたのはあんたってことか」

「失礼な、ちゃんと現場にいたんですからね、写真もちょうど蹴りが決まったところじゃないですか」

「誤解される書き方を止めて下さい、あれじゃあ俺がとんでもなく強い人みたいになってるじゃないですか」

「はいはい、いったんストップ。今日は何の話を聞きに來たの？話はそこからよ」

確かに、それが先だ。

「ああ、今日はその強さの秘密と、あとはどうしてここに來たかです」

「そして話したことに上乘せされて乗るんだろ、いやです」

「そう言われて黙って帰ると思いますか？」

「俺じゃなきゃだめなのか？」

「もう記事は決めてありますから」

はあ、何でおれはこついうのに弱いんだろう。

「わかりました、もう折れます」

「では早速お伺いいたします〜」

「いいの？ 祠雷」

「俺は押しが強いのは苦手なんだよ……」

「なるほど、小さい時にお父様から」

「そう、他にもいろいろ仕込まれた」

「それでここにいるのは強くなるためと」

「まあ、そう言うことかな」

今思つとんでもない理由だな。

「お話ありがとうございます〜」

「へえ、じゃああんた小さい頃から物騒なもん扱ってたわけね」

「まあ小学生のうちから実銃扱ってたしそうなるわな」

「以外に修羅場超えてんのね」

「あんまり触れてほしくないけど」

ちなみに次の日の新聞はまともだった。

それから1週間。

俺は、飛ぶ練習の真っ最中である。まあ射命丸が飛んでるの見たら飛びたくなるのもわかるだろ？ な？

「そうそう、よく飛べてんじゃない」

「あー、何となくコツがわかってきた」

（美鈴との勝負から伸びが早いわね、やっぱり自信がついたただけでも違うのかしら）

慣れてくると本当に簡単なもんなんだな。空中回転お手の物、急降下とかもできちゃう。地味に怖いけど。

「これで今度からあんたもお使いにだせるわね」

「最初からそれ目的だろ……」

（これくらいできたらお使いに行かせても食材は安泰ね）

「もしもしあんたは心の声のつもりかもしれないがバツチリ口に出てるぞ」

「ハッ！　しまった」

「何がしまっただよ、おもいつきしさぼる気満々じゃねえか、ここ1週間、弾幕ごっこにも妙に熱心に特訓してくれると思ったらそう言う目的かよ」

「最初に助けたのは誰だっけ？」

「ごめんなさい……（尻に敷かれるってこんな感じなのか？）」

その様子を影から見る人影が一人。

「あやややや、完璧にパシル気満々ですねえ。1枚撮るときですか」

そのあとの射命丸の運命は言うまでもない。

「しかしねえ、祠雷もそろそろ人里に慣れてもらおうと思うわけよ」

「はあ」

「あんたの実力はここ1週間で本当に伸びてるわ」

「そしてその間の霊夢のお茶タイムが増えるわけですね」

「そうそうよくわかったわね」

「言っちゃいますか」

「祠雷もいつまでも独り立ちできないのはいやでしょ」

それはそうだけど俺は何にも知らないのに……

「地図の通りだから、お願いね」

「いきなりは早すぎるだろ」

「親切な人も多いし大丈夫よ」

……恨むぞ霊夢。

どこが地図に書いたとおりだよもつ。さっきから迷いっぱなしだぜおい。

……もしかしてあの姿は？ やっぱりだ、助け舟登場だぜ。

「おーい、魔理沙ー」

「おお、誰かと思えば祠雷じゃねえか、ちよつどいい、用があるんだよ」

「用？ とりあえず買い物手伝ってからにしてくんね？ 迷っちゃつてさ」

「おしわかった。じゃあ先に買い物手伝ってやるから、まずはどこだ？」

「助かったよ魔理沙」

「いいってことよ。困ったときはお互い様だぜ」

「そんで用事って何？」

「ついてきてほしいんだぜ、報酬も弾むぜ」

報酬もあるのか、何なんだろう？

「早く行こうぜ」

そう言つて飛び立つ魔理沙、けどすぐに引き返してきて……

「あっちゃー、飛べないんだっけ？」

「ああ、もう大丈夫、なんとか飛べるようにはなったから」

「おお、いつの間にか進化してるぜ、まあとりあえずこつちだぜ」

そう言つて魔理沙が飛んでいったのは……魔法の森か。
グズグズしてるとおいてかれそうだ、全速前進！

「……おい、ちょっと待ってー！」

速度ではかいません、はい。

何とかついて行ったらそこには1軒のお店があつた。

香霖堂。それがお店の名前だつた。

「霖之助ーいるんだろー」

中はいろんなものが置いてあつて何の店なのかいまいちわからないんだが……

「やあ、魔理沙じゃないか、何か用かい？」

「あの話、覚えてるだろ？」

「ああ、ここにある機械を動かせそうな人に心当たりがあると」

「それがこいつだ」

魔理沙と話しているのはメガネをかけた男の人で不思議そうな眼でこつちを見ている。

「えっと君、名前は？」

「神依崎祠雷です」

「僕は森近霖之助、こここの古道具屋の店主をやっている」

古道具屋だったのか。

「それで君は本当にこここのものを動かせるのかい？」

「えっと、具体的にどんなものをでしょうか？」

「とりあえずここに置いてあるものなんだけど……」

「祠雷なら動かせるだろ、電気を使えるんだし」

「もしできたのならお代は弾むよ」

そう言って見せてきたのはパソコン、テレビ、その他e t cの電化製品だ。これくらいなら動かさそうだけど……

「多分できると思います」

「本当かい！？ だったら手始めにこれから頼むよ」

あれ？ いつの間にか手伝うこと前提になってるような？ まあ別に構わないんだけどさ。

えーと、このパソコンはここから充電できるんだな。

指から電気を出して充電していく、直流交流なんでも来いだぜ。

スイッチ、オン。

一通りのものを動かすと霖之助さんは感動のあまり。魔理沙は何がどうなっているのかわからないという顔をしている。

「あの……どうしたんですか？」

「いやー今日はいいもの見せてもらったねえ」

いいものだったんだ、まあ電気がないのも事実なんだし電化製品が動いてるのを見るのも貴重な体験なんだろうな。

「あっそうそう、これはお礼だよ。」

そういつて霖之助さんが渡してくれたのはお金、どんぐりの価値なのかは知らないが。

「すげえ！　こんな大金持ってたのかよ」

「失礼な、僕だつて金銭面では余裕があるよ」

「魔理沙、どんぐりの金なんだ？」

「そんだけあつたら2年間それなりの食事ができるぜ」

「僕の長年の夢をかなえてくれたんだ、このくらい軽いものだよ。ここにあるものが動くのを見るのはね」

「じゃあ時間とらせたな、悪かった」

「僕からもお礼を言おう、また暇な時にお願いできるかい」

「ああ、大丈夫です」

ああ、俺こういうことしたら親しくなれるスキルとかあるのか。

「じゃあお邪魔しました」

「いつでも歓迎するから」

予想外の収入があつたな、霊夢を待たせても怖いし早く帰ろう。

いろいろある日（後書き）

文編、こーりん編、成長編の急展開を無理して詰め込んだ回です。

作者に、もう少しゆとりを持ってと期待してもいけません。
文章力分けてくださるのなら別ですけど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838x/>

俺と雷と幻想郷!?

2011年11月20日09時35分発行